第 25 回　これからの学術情報システム構築検討委員会　議事要旨

1.　日時：2019 年 10 月 29 日（火）15：00～17：00

2.　場所：学術総合センター　19 階　1901 会議室

3.　出席者：

（委員）

小山　憲司　　中央大学 文学部 教授
相原　雪乃　　北海道大学附属図書館 事務部長
佐藤　初美　　東北大学附属図書館 情報管理課長
粟谷　禎子　　公立はこだて未来大学情報ライブラリー
原　　修　　立教大学図書館 利用支援課 課長
飯野　勝則　　佛教大学図書館 専門員
近藤　茂生　　立命館大学図書館 学術情報部 次長
柴尾　　晋　　明治大学 学術・社会連携部図書館総務事務室副参事
大向　一輝　　東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
福島　幸宏　　東京大学大学院情報学環 特任准教授
小野　　亘　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長
片岡　　真　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（欠席）

米澤　　誠　　京都大学附属図書館 事務部長
塩崎　　亮　　聖学院大学基礎総合教育部准教授

（陪席）

木下　　聡　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長

（事務局）

藤井　眞樹　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
　　学術コンテンツ整備チーム係長(CAT/ILL 担当)
上野　友稔　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
　　学術コンテンツ整備チーム係長(次期 CAT/REO 担当)

＜配付資料＞

委員名簿
第 24 回これからの学術情報システム構築検討委員会　議事要旨
1-1.　2019 年度作業部会の活動計画について（概要）
1-2-1.　システムモデル検討作業部会の活動計画（案）

1-2-2.　システムモデル検討作業部会の検討状況
1-3.　システムワークフロー検討作業部会の活動計画（案）
2.　「JUSTICE 提案書情報のデータ共有に関する実証実験」協力機関の募集について（依頼）
3.　図書館総合展について
4.　CAT2020 説明会等について

＜参考資料＞

1.　これからの学術情報システムの在り方について（2019）
2.　これから委員会_2019 年度以降の体制図（叩き台）（第 24 回これから委員会 配付資料 1-1-2）
3.　2019 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動計画
4.　システムモデル検討作業部会委員名簿
5.　システムワークフロー検討作業部会委員名簿
6.　JUSTICE 提案書情報のデータ共有について（第 24 回これから委員会 配付資料 2）
7.　連携体制強化による活動について（協力依頼）（2018 年度第 4 回 JUSTICE 運営委員会資料）
8.　これから委員会との連携体制について（2019 年度第 1 回 JUSTICE 運営委員会資料）

4.　議事：

議事に先立ち、小山委員長より、大向委員の所属先変更の変更について、今年度は継続して委員として活動されることについて報告があった。

1.　2019 年度作業部会の活動計画について

小山委員長より、資料 1-1 の参考資料としての取り扱いについて説明があった後、相原システムモデル検討作業部会主査より、資料 1-2-1 及び 1-2-2 について、続いて飯野システムワークフロー検討作業部会主査より、資料 1-3 について説明があった。審議の結果、意見交換の内容を踏まえ、2019 年度の両作業部会の活動計画を承認した。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[システムモデル検討作業部会のスコープについて]

- 議論の前提として目録業務のための在り方を議論するのか。これから委員会の議論は、より大きな枠組みの議論をしたほうが良いのではないか。
  - 目録業務だけに集中するつもりはないが、NACSIS-CAT を出発点としており、目録業務が今後どのようになっていくかを検討するという意味合いもある。目録業務だけにスコープを限定するつもりでの表現ではない。

[システムモデル検討作業部会の検討について]

- システムモデル検討作業部会は委員会のメンバーで構成し、システムワークフロー作業部会は多くの方にご協力いただいて議論を行っているが、議論の中で留意すべき点

にはどのようなものがあったか。

- NII や国立大の視点からのシステム・運用の見え方と、私立大・公立大との見方は違っているように思える。30 年前の理念と実態が乖離しており、単に維持だけを目的として経費負担をお願いするよりは、よりよいサービスが受容できるようになる、といった前向きな協力体制を、関係する大学・機関全体で共有していく必要があるのではないか、などがあった。

- 「在り方（2019）」で示したものよりも、より具体的でブレイクダウンした目標を大学に向けて提供したほうが良いのではないか。これについては部会から出してもらうというのではどうか。
  - 目的・目標が一致するように、「在り方（2019）」を噛み砕いて大学に共有するのが良いのではないか。
  - 作業部会で議論をいただき、アイデアを出していただきたい。
  - 統合的発見環境を作るというのが委員会の目標だが、30 年前は総合目録を作ることが目標だったが、現在の状況に合わせて統合的発見環境を構築する中で、最適な目録業務が何かということについても議論する必要がある。
  - そもそもは書誌コントロールを実現するという理念そのものは変わっていないが、それをどのように実現するか、今の世の中に用意されているツールをどのように組み合わせるかなどによって実現方法が変わってきているという理解でいる。
- 書誌コントロールの重要性については、いずれかの資料に記述があるのか。
  - 書誌コントロールが大切というのは当たり前なのだが、書誌作成の現場が委託などになっており、状況の変化がある。資料 1-1 で示してもらった世界観の内容がわかりやすいのではないか。

[国立国会図書館とこれから委員会との連携の進め方について]

- 国立国会図書館との意見交換をどのように進めるか。
  - メタデータ高度化と統合的発見環境に関わると考えているが、作業部会の窓口などをどのようにするかはこれからの検討課題である。
  - 国立国会図書館の書誌調整連絡会議との関係で、これから委員会と国立国会図書館との関係に何か影響があるか。
  - 書誌調整連絡会議は情報交換の場なので、その情報を手がかりに部会の検討の参考とさせていただくことになる。
- 国立国会図書館との連携は、作業部会の主体的な活動になるのか、それとも事務局の主動で進めるのか。
  - 将来的には公式な検討体制を構築したいと考えているが、テーマが多岐にわたることや、委員会側での体制などをどのようにするかなどについて、検討を始めた段階である。
  - 国立国会図書館・JST などの関係する組織とは、連携して議論・調整を行う段階にあるということについては、委員会でも合意されている。委員会側の体制についても考える必要があるのではないか。

- 国立国会図書館と大学の間に経路はあるのか。また、この委員会に参加していただくことは可能なのか、全く新しい体制を作るのが良いのか。
  - この委員会に参加していただくことが望ましいということであれば、可能である。
  - 国立国会図書館と大学図書館との関係としては、年 1 回、「国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会」という公式な情報交換の場がある。
- 関連して、毎年 1 回「NII・JST・NDL 連絡会議」があり、担当者レベルでの検討の場を作りたいという話がでている。これから委員会のインターフェースが NII であるという形でパスを設けることもできるのではないか。
  - 「NII・JST・NDL 連絡会議」とこれから委員会の検討の整合性を取る必要があるか。
  - 現在の課題の一つに、メタデータの流通があり、この点からスタートすることを検討している。現状では、具体的な連携までは進んでいない。
  - 国立国会図書館への経路の整理と、これから委員会との関係についての検討が必要である。
  - メタデータの高度化とデジタルアーカイブのメタデータ整備については、国立国会図書館の動きも見ながら進めていきたい。
- 大学の中で閉じたままで議論ができるものと、外部との連携を踏まえて検討するものを整理する必要がある。また、国立国会図書館との新たな体制・窓口づくりが必要であるという課題が見えてきた。

[デジタルアーカイブについての取り組みについて]

- デジタルアーカイブでは、国立国会図書館のジャパンサーチとの連携を積極的に進めたほうが良いと考えるが、デジタルアーカイブが議論に上ってきた背景について教えていただきたい。また、システムワークフロー作業部会の活動計画の中に、ジャパンサーチとのまとめ役としての対応検討という課題があるが、どのようなことを目指しているかを補足していただきたい。
  - 部会の活動の中でデジタルアーカイブをどう扱うことができるかを検討する。
  - 大学図書館は現状ではジャパンサーチとは連携が進んでいないが、大学図書館のデジタルアーカイブのメタデータをまとめてジャパンサーチに流せるような仕組みなどができるかを考えていきたい。システム的な対応は難しいかもしれないが、大学でデジタルアーカイブを整備する際のメタデータの指針や、ジャパンサーチとの連携のつなぎができれば十分ではないか。
- 大学図書館で個別に構築しているデジタルアーカイブを、イニシアチブを取って取りまとめるかということが気になっている。
  - デジタルアーカイブのメタデータを、分野や地域などでまとめて、発見のしやすさのためにジャパンサーチに投入するための調整ができれば良いのではないか。
  - 大学図書館での書誌の連携は、NII を通じて NDL サーチと連携している。
  - ジャパンサーチと大学図書館のデジタルアーカイブについては、国立国会図書館が例えば東大や立命館などに個別にあたっている。大学図書館としてまとま

って対応するべきなのか、国立国会図書館の動きに任せるか、方針を固めたほうが良い。

- 複数のレベルの話題があり、ターゲットは大学図書館なのか大学なのか、最初のレイヤーの話からすれば単にメタデータを集約すればいいのか、自動化の前にフォーマットとエレメントをどうするかなどについて、どこまで委員会・大学図書館で検討するか、メタデータの高度化をメタなレベルで議論する必要がある。

- ジャパンサーチが主要な大学のデジタルアーカイブを収録したらそれで終わってしまうのではないかという懸念も持っている。
  - デジタルアーカイブの登録システムとしては機関リポジトリ、あるいはそのソフトウェアが選択肢になるし、機関リポジトリのメタデータは学術機関リポジトリデータベース（IRDB）を通じて流通できるという利点もあるのではないか。
  - デジタルアーカイブのメタデータ高度化については検討項目が見えてきたが、どこまで取り組むかは部会と事務局で整理してもらいたい。

2. 「JUSTICE 提案書情報のデータ共有に関する実証実験」協力機関の募集について

事務局より、資料 2 に基づき説明があった。審議の結果、意見交換の内容を踏まえ、大学図書館コンソーシアム（JUSTICE）に依頼することを承認した。

主な質疑・意見交換は次のとおりである。

- 今回の実証実験が目指すゴールは、JUSTICE が保有している各参加館に渡すデータ項目の検討なのか、データの受け渡し方法まで含めた検討になるのか。
  - 今回の実証実験では、中央システムに新たに 20 程度のパッケージ情報を利用できるように準備する。利用については、管理の効率化やユーザサービスへの活用も考えられる。電子リソースのデータが、無理なく適切に提供されているかを確認したい。また、課題があることは聞いているが、どの程度の提供が適切なのか、様々な要件を一通りフィードバックとしてもらい、それをまとめて NII の中央システム整備につなげていきたいと考えている。
- タイトルリストだけでなくて利用条件も含めるのか。
  - タイトルリストと利用条件を対象とする。また、大学によっては電子ブックの利用条件をまとめて提供したいという要望も頂いている。
  - これまでも議論はしてきたが、改めて今現在のデータを使って、今まで得られた意見を元にしたデータの提供と活用の実験を行う。
  - JUSTICE 参加館で共通的な課題も出てくるだろうから、情報交換をしながら方向性を定めていきたい。
  - 今年度どの程度の参加館が協力してくれるのかが心配であるが、今年度に限らず次年度以降も継続して参加していただけるよう、JUSTICE とも調整をしたい。
  - 今回参加される機関の課題は、他の大学の課題でもあると思うので、実証実験の初期段階としては良いのではないか。
- JUSTICE の提案書情報は、全部でいくつのパッケージ情報の登録が必要なのか。

- トータルでは200だが、グローバルなデータと共通のものもあるため、JUSTICEの提案書情報のすべてが本当に必要となるのかも確認する。

- パッケージの提供者にメタデータも標準化を希望するのか。
  - 狙いの一つであるが、JUSTICE 事務局からの話では、出版社から希望するフォーマットでデータを出してもらうことは難しいので、各大学で同じ作業をしなくて済むように、JUSTICE 事務局と NII で整理する。
- 実験参加館で情報共有には、例えばどのタイトルを何巻何号まで利用可能など、統合的発見環境の実現という意味での情報共有になるのか。
  - 募集要項にも記載しているが、電子リソースの利用条件は他機関から見えないのがデフォルトなので、まずはタイトルリストの共有からスタートし、利用条件も含めて見えるような形に発展できればと考えている。
  - バックグラウンドで持っている利用条件を見て次にどのように利用するのかは次のフェーズで考えればよく、例えば AI 技術をもちいて電子の ILL 依頼を最適になるように割り振るなど、技術を用いた将来像は色々と考えられる。まずは、その基盤を構築するところから始めるということで理解した。
  - できたら良いことをフィードバックいただく。電子ブックの MARC を出してほしいなどすでに要望は上がっている。
  - 電子リソースデータの共有については委員会の継続的な課題であるので、仕組みづくりは継続して行うとともに、国立国会図書館との連携も重要になるのではないか。

3. 図書館総合展について

事務局より、資料 3 について報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- 総合展当日の動画配信はどのようになっているか。
  - 当日は全体の動画配信を行い、後日の映像公開はパネルディスカッション・質疑応答部分を除いて配信を行う。
- ベンダーに依頼した発表については、前回の委員会で製品情報に偏らないようにという話があったが、実際は製品情報についても含まれているという理解で良いか。
  - 発表全体の割合では少なめにしてほしいという要望はしているが、製品紹介についても発表には含まれている。

4. CAT2020 について

事務局より、資料 4 について報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- CAT2020 に関する質問の内容には、以前と比較して変化があるのか。

- 資料を読み込んで細かい質問をされることも多いが、それが全てではなく、初歩的な質問の場合もある。

- 質問のなかで回答に困るような事例があったか。
  - 目録作成の極めてめずらしい事例や、図書館システムの CAT2020 対応ににについて質問されることもあった。
  - 無事にサービス開始ができるかが重要なので、進捗に問題がないのならば良い。
- 大学によっては、理解の不足している職員と、言葉が足りないベンダーとの間で、不正確なやり取りが発生している場合もあるので、気にかけていただきたい。
  - 北海道の説明会では、ベンダーの話や現在の図書館での目録作業を考えて、慌てず段階を踏んで検討してもらいたいと言う趣旨で説明を行った。

5 その他

小野委員より、これから委員会の活動に関係する、ERDB-JP と JAIRO Cloud との連携について、規定の整備やシステムの改修状況などについて、報告及び説明があった。

以上